

北海道大学スラブ研究センター所蔵 チェコ文学コレクションの装丁作品について

——神奈川県立近代美術館における展覧会

「チャベック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド」後の追跡調査研究——

神奈川県立近代美術館 学芸員 粉山昌夫

I 調査に至る背景

チェコの書籍装丁は、文芸のモダニズムを否定してきたチェコスロヴァキア共産党政権が1989年のビロード革命によって崩壊し、チェコのアヴァンギャルド芸術(チェコ・アヴァンギャルド)が美術史研究の対象となると共に、その重要な分野のひとつとして欧米を中心に紹介されるようになった。それに伴って、国内では大阪市近代美術館準備室などの機関や個人が、両大戦間のアヴァンギャルドの代表的な装丁作品を中心にコレクションを形成してきている。

チェコ・アヴァンギャルドの書籍装丁に関するこれまでの研究を、同時多発的に展開されたヨーロッパのアヴァンギャルド運動の文脈の中で、いわば水平方向に総括したのが、西野嘉章氏による『チェコ・アヴァンギャルド ブックデザインに見る文芸運動小史』(平凡社、2006)である。また、国内の美術館におけるチェコの装丁作品の紹介は、「チャベック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド」展(2002、神奈川県立近代美術館ほか)とその巡回展である「ブックデザインの源流を探して——チェコにみる装丁デザイン」展(2003、印刷博物館)に始まり、最近の「チェコ・絵本とアニメーションの世界」展(2006、美術館「えき」KYOTOほか)など近年特に進展しつつあるが、今後、この分野の紹介も水平方向のみならず、歴史的、体系的に通観するような、いわば垂直方向への深化が期待される。

ところで、筆者は「チャベック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド」展を2002年に神奈川県立近代美術館にて企画開催した後、それまでその存在があまり認知されていなかった北海道大学スラブ研究センターの「チェコ文学コレクション」に注目してきた。そして、同研究センター情報資料部の兎内勇津流氏の協力の下、2007年1

月にその全点について調査を行う機会を得た。

北海道大学スラブ研究センターは、1953年に同大学内に組織されたスラブ研究室に遡るスラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧地域)の総合的な研究を目的とした全国共同利用施設で、その蔵書は、国内研究者の研究調査のための資料を蓄積するという観点から系統的に整備され、2005年3月時点で約123,000点の図書、44,000点のマイクロ文献、1,600種類の逐次刊行物を所蔵している。「チェコ文学コレクション」は1992年度に購入され、20世紀チェコ文学史上重要な作家の著作をある程度系統的に集めた883点からなる蒐集である。しかし、「チェコ文学コレクション」は、その名称が示唆する通り、文学研究のためのテキスト的素材、つまり文字資料としての利用に留まり、これまで、それらの装丁については着目されず、未調査の状態であった。

Ⅱ チェコ文学コレクションの中の主要な装丁家など

さて、チェコ文学コレクション(以下、「蒐集」という)は、19世紀のもの33点、第一次世界大戦の過程でチェコスロヴァキアが独立する1918年以前のもの71点、チェコスロヴァキアが解体して第二次世界大戦が勃発する1939年以前のもの466点、1945年の第二次世界大戦終結までのもの100点、それ以降のもの182点、出版年不明のもの31点からなり、チェコの20世紀の出版を概観できる(出版年の明らかなものの範囲は1837年から1971年)。内容については、科学や宗教分野も含むが、その大半は詩集や小説、戯曲など文学的なものである。

ところで、チェコでは20世紀初頭にはすでに、書籍装丁が芸術的な仕事として意識的に行われるようになっていた。事実、この頃には書籍の奥付に装丁家など(挿絵画家や後にはタイポグラファーを含む)の名前が記されるようになった。第一次世界大戦後の1920年代になると、フランチšek・ボロヴィー、アヴェンチヌム、オデオンの出版社は、表紙の絵を描いた画家と表紙全体のデザインの構成者を併記し、さらには扉の出版社ロゴや見返しデザインの作成者まで記す場合もあった。また、画家などが表紙絵の中に署名を入れる場合もあり、これも芸術の一分野として書籍装丁が認識されていたことを示す例と言える。

蒐集に含まれる主要な装丁家などの作品は以下の通りである。

ヴラチスラフ・H.ブルネル (1886-1928) 21点

ヨゼフ・チャベック (1887-1945) 39点

アレクサンドル・V.フルスカ (1890-1954) 7点[fig.1]

ヨゼフ・シーマ (1891-1971) 5点

エドゥアルド・ミレーン (1891-1976) 25点

カレル・スヴォリンスキー (1896-1986) 10点

ラジスラフ・ストゥナル (1897-1976) 11点

オタカル・ムルクヴィチカ (1899-1957) 9点[fig.2]

インドジフ・シュティルスキー (1899-1942) 8点

カレル・タイゲ (1900-1951) 13点

フランチšek・ムズイカ (1900-1974) 22点

ヴォイチェフ・ティテルバハ (1900-1971) 5点

ヴィート・オブテル (1901-1988) 5点

トワイヤン [マリエ・チェルミノヴァ] (1902-1980) 4点

ズデニェク・ロスマン (1905-1986) 6点

ヤロスラフ・シュバーブ (1906-1999) 15点

ズデニェク・セイドゥル (1916-1978) 15点



fig.1 ヤロスラフ・マリア『ソドム』第3巻 (1935) 装丁・表紙：アレクサンドル・V.フルスカ



fig.2 フランチšek・コジーク『マリエ・ロマノヴァを探して』(1941) 装丁・挿絵：オタカル・ムルクヴィチカ

Ⅲ 装丁作品の具体例

蒐集の中で20世紀初頭の装丁家として際立っているのは、ヴラチスラフ・H.ブルネル⁽¹⁾で21点を数える。フランチšek・ボロヴィーやアヴェンチヌムといった出版社を中心にフラワーニャ・シュラーメクやイジー・マヘンの著作の装丁で活躍している。シュラーメクの短編集『石と心臓と雲』(1906)やマヘンの詩集『小さな炎』(1907)[fig.3]の表紙など、初期の装飾的な装丁は世紀末芸術の雰囲気をも濃厚に留めている。ヨゼフ・チャベックなどと「造形作家グループ」を1911年に結成した後のブルネルの装丁には、キュビズムの影響、幾何学的形態への関心が認められるようになる。



fig.3 イジー・マヘン『小さな炎』(1907) 表紙：ヴラチスラフ・H.ブルネル

なる。ヴィクトル・ディク著『イジー・マツェクの闘い』(1916)[fig.4]の表紙と見返

し、マヘン著『月』(1920)やシュラーメクの戯曲『ハーゲンベック』(1920)やディク著『道に沿って』(1922) [fig. 5]の表紙は、ブルネルの装丁にしばしば見られる繊細な線による幾何学的な枠が特徴的である。オタカル・フィシエル著『アンゲルス・シレシウス』(1922) [fig. 6]は、幾何学的な枠を銀箔押しした美しい装丁であるが、これは当時の装飾様式、アール・デコの優れた装丁といえる。一方、フィシエルの戯曲『カルステイン』(1916)の表紙絵と挿絵、ヤン・バルトシュの詩集『青春』(1919)の扉絵、シュラーメク著『生涯の榮譽』(1919) [fig. 7]やシュラーメク著『ピアノとバイオリン』(1920)の表紙絵などは、前者とは異なる素朴な線描による人物像となっている。

ブルネルと対照的に、平面を活かしたりノカット版画を多用したヨゼフ・チャベック⁽²⁾の装丁は出版社アヴェンチヌムを中心に39点を数える。蒐集の中で最も早いチャベックの作例はベルリンで出版されたフランツ・プフェムフェルト編のアンソロジー『ディ・アクツイオーンの叙事詩——チェコの最新叙事詩』(1916)の表紙絵であり、初期のチャベックのキュビズムへの傾倒をよく示している。その後のチャベックの芸術は、ドイツ表現主義の要素も含んだ立体未来主義と、彼自身の原始民族芸術への関心に結びつくプリミティヴィズムを特徴とするが、それは大胆かつ素朴なりノカット版画による書籍の表紙に端的に現れている。実際、後にヨゼフ・チャベックは『未開民族の芸術』(1938) [fig. 8]を著している。

蒐集の中のチャベックの装丁作品は下記の通りであるが、その半数以上はヨゼフ・チャベックの約120点の書籍装丁を紹介した神奈川県立近代美術館における前述の「チャベック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド展」にも出品できなかった書籍(*を付した)であった。



fig.4 ヴィクトル・ディク『イジー・マツェクの園い』(1916) 装丁: ヴラチスラフ・H. ブルネル

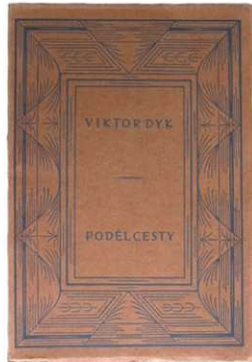


fig.5 ヴィクトル・ディク『道に沿って』(1922) 装丁: ヴラチスラフ・H. ブルネル



fig.6 オタカル・フィシエル『アンゲルス・シレシウス』(1922) 装丁: ヴラチスラフ・H. ブルネル

- ヨゼフ・チャペック著『最も慎ましやかな芸術』(1920)
スタニスラフ・K.ノイマン著『絶望者たちの夢』(1921)
シュラーメク著『川の上の月』(1922)
ヨゼフ・チャペック著『多くの名をもつ国』初版(1923)と
第2版(1923)
シュラーメク著『6月』第2版(1923)
シュラーメク著『泣いているサテュロス』(1923)
カレル・チャペック著『イタリア便り』第2版(1924)
*チャペック兄弟著『輝く深淵』(1924)
*ヤロスラフ・ドゥリフ著『花占い』(1924) [fig. 9]
*フランチシェク・クプカ著『F U』(1924) [fig. 10]
*マヘン著『チェコの性格についてのノート』(1924)
シュラーメク著『判決』初版(1924)
*エミル・ヴァヘク著『死者との結婚』(1924)
コンスタンチン・ビーブル著『バクダッドの盗賊』(1925)
フランチシェク・ランゲル著『夜』(1925)
*ランゲル著『町外れ』(1925)
*ノイマン著『戦争の文明性』(1925)
*シュラーメク著『判決』第2版(1925)
*シュラーメク著『ビードの人生、それでもおまえを愛す』
第2版(1925)
ビーブル著『金の鎖で』(1926)
アドルフ・ホフマイステル著『南回帰線』(1926)
フランチシェク・クプカ著『ドッベルゲンガーと夢』(1926)
*シュラーメク著『大いなる愛の島』(1926)
ランゲル著『グランドホテル・ネヴァダ』(1927)
*カレル・ノヴィー著『小さな町ラニェコフ』(1927)
カレル・ボラーチェク著『吾らの周りで』(1927)
*ヴァヘク著『ビディールコ』(1927)
*ヴラジミール・ラッフエル著『感傷譚』(1928) [fig. 11]

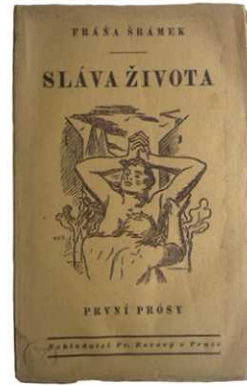


fig.7 フラーニャ・シュラーメク
『生涯の栄誉』(1919) 装丁・表紙: ヴラチスラフ・H. ブルンネル

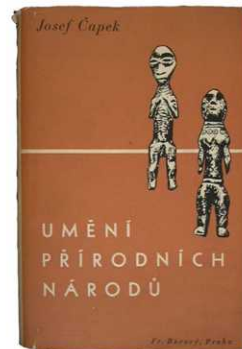


fig.8 ヨゼフ・チャペック『未開民族の芸術』(1938) 装丁: フランチシェク・ムズィカ

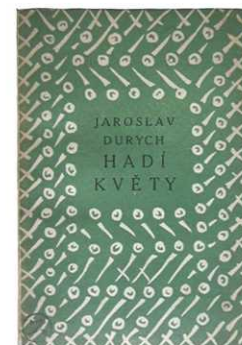


fig.9 ヤロスラフ・ドゥリフ
『花占い』(1924) 装丁: ヨゼフ・チャペック

- *ベンジャミン・クリチカ著「ABCDEを望んだ男」(1928)
- *カレル・チャベック著「言葉の批評」第3版(1929)
- *チャベック兄弟著「創造者アダム」第5版(1929)
- *オルガ・シャインプフルゴヴァー著「愛がすべてではない」
初版(1929)
- ヤロスラフ・サイフェルト著「ライスカー公園の上の星」(1929)
- *ヨゼフ・コプタ著「鯨の前の5人の罪人」第4版(1930)
- *コプタ著「アドルフは死を待つ」(1933)
- *シャインプフルゴヴァー著「グリユネフェルト氏と幽霊」(1933)
- *カレル・チャベック著「園芸家の1年」版不明(1939)

ちなみに、共にラッフェル著作のアヴェンチヌム叢書「感傷譚」(1928) [fig. 11]と「肉体譚」(1928) [fig. 12]は、前者はチャベック、後者はフランチšek・ムズイカが表紙を担当して対照的な様式となっている。

チェコ・アヴァンギャルドを代表する装丁家カレル・タイゲ^③の作品は、出版社オデオンを中心に13点を数える。残念ながら蒐集には、1920年に結成され、タイゲが理論的支柱となったデヴィエトスィル芸術家協会の年鑑や機関誌、それにチェコ・アヴァンギャルド文芸出版物の代表作とされるヴィーチェスラフ・ネズヴァル著「アルファベット」(1926)などは含まれていない。しかし、初期のタイゲが立体未来主義の影響下にあったことを示すヤロスラフ・サイフェルト著「涙の街」初版(1921)、構成への関心がより明らかなヴラチスラフ・ヴァンチュラ著「耕地と戦地」(1925) [fig. 13]、マリネッティの「自由語」による視覚構成の影響を受けたサイフェルト著「無線電信の波の上で」(1925)、表紙にオタカル・ムルクヴィチカとの共同制作によるフォトモンタージュを用いたイジー・マヘン著「繋がれたガチヨウ」(1925)、写真とタイポグラフィーという断片化され

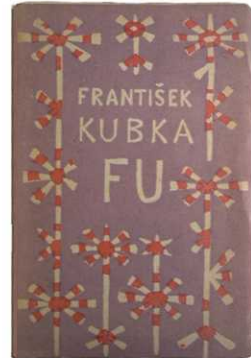


fig.10 フランチšek・クブカ「FU」(1924) 表紙：ヨゼフ・チャベック

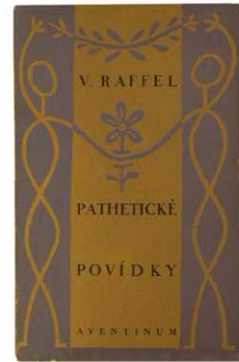


fig.11 ヴラジミール・ラッフェル「感傷譚」(1928) 装丁：ヨゼフ・チャベック

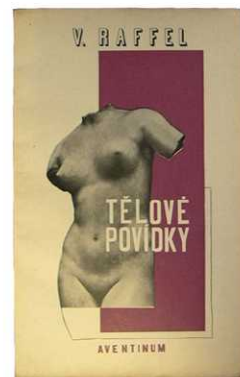


fig.12 ヴラジミール・ラッフェル「肉体譚」(1928) 装丁：フランチšek・ムズイカ

たイメージと活字を並列させた、いわゆる「絵画詩」によるヴァンチュラ著『パン職人ヤン・マルハウル』第2版(1925)、小文字あるいは大文字だけからなる機能主義的タイプセットと構成主義的な幾何学デザインが特徴的なコンスタンチン・ビーブル著『お茶と珈琲を運ぶ船とともに』第2版(1928) [figs. 14, 15]、ビーブル著『挫折』新版(1928)、サイフェルト『涙の街』第3版(1929)など、第一次世界大戦後の1920年代に急展開したチェコ・アヴァンギャルドと共にタイゲの装丁も変化していたことを例証する作品が含まれている。

このほか、ヴァーツラフ・シュパーラ(1885-1946)、ヴラスチスラフ・ホフマン(1884-1964)、ヤン・ズルザヴィー(1890-1977)、フランチシェク・チヒー(1896-1961)、アドルフ・ホフマイステル(1902-1973)、ヨゼフ・ラダ(1887-1957)、イジー・トゥルンカ(1912-1969)などによる書籍装丁も存在する。

なかでも、ボスコヴェツ(イジー・ヴァクスマン)とヴェリフの『自由劇場の10年 1927-1937』(1937) [fig. 16]は、ホフマイステルによる装丁と挿絵、特に劇場の内部を構成した裏表紙が印象的であるが、当時の舞台芸術を知る上でも第一級の資料である。

また、フランチシェク・フルビーン著『鋼からパンを』(1945) [fig. 17]のジャケットにアントニン・ストウルナデルが描いたスターリンと赤軍の力強いイメージは、ソ連軍によるチェコスロヴァキアの解放とその後の共産主義化という歴史的背景を如実に物語っている。

その後のフルビーン著『金のレネタ』(1964) [figs. 18, 19]は、初版24000部発行の戦後の一般的な書籍であるが、ジャケット、表紙、見返し、口絵、挿絵をズデニェク・サイドゥルが統一的なデザインにまとめている、チェコの書籍装丁

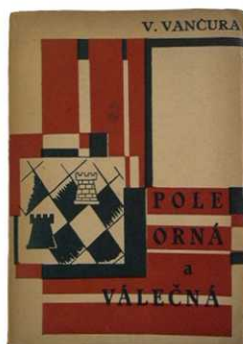


fig.13 ヴラチスラフ・ヴァンチュラ『耕地と戦地』(1925) 表紙: カレル・タイゲ



fig.14 コンスタンチン・ビーブル『お茶と珈琲を運ぶ船とともに』第2版(1928) タイポグラフィ・モンタージュ: カレル・タイゲ



fig.15 コンスタンチン・ビーブル『お茶と珈琲を運ぶ船とともに』第2版(1928) 口絵・扉



fig.16 ボスコヴェツ&ヴェリフ『自由劇場の10年1927-1937』(1937) 裏表紙 装丁・挿絵: アドルフ・ホフマイステル

のよき伝統が戦後も存続していたことをよく示している。

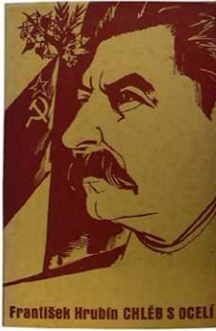


fig.17 フランチšek・フル
ピーン「鋼からパンを」(194
5) 表紙：アントニン・ス
トウナデル

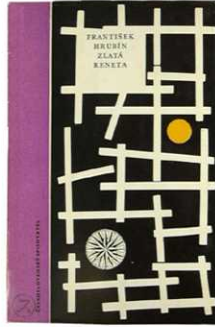


fig.18 フランチšek・フル
ピーン「金のレネタ」(1964)
カバー 挿絵・タイポグラ
フィー装丁：ズデニェク・サイ
ドゥル



fig.19 フランチšek・フル
ピーン「金のレネタ」(1964)
表紙

IV 今後の展望と可能性

ここで紹介できたのは、北海道大学スラブ研究センター所蔵のチェコ文学コレクションに含まれる装丁作品の一部に過ぎないが、それでも、20世紀チェコの書籍装丁の流れを歴史的に俯瞰する上で貴重な蒐集であることは明らかである。もし、この蒐集に加えて、チェコ・アヴァンギャルドの代表的な装丁作品を集めている国内の機関や個人の協力を得られれば、国内のコレクションだけでもチェコの書籍装丁を歴史的、体系的に通観するような展覧会を構成することも十分に可能であると思われる。

註

- (1) Vratislav Hugo Brunner 挿絵画家、風刺画家、装丁家。プラハ美術アカデミーに学ぶ。1919年から晩年までプラハ美術工芸学校の教授。1925年、パリの装飾芸術博覧会(アール・デコ展)において書籍装丁で金賞受賞。
- (2) Josef Čapek 画家、装丁家、戯曲作家。プラハ美術工芸学校に学び、1910年と1912年にパリでキュビズムとプリミティヴィズムの影響を受ける。単純化されたプリミティヴなりノカット版画を用いて、弟カレルの著作を始め500点を越える本の装丁を手掛けた。
- (3) Karel Teige 批評家、装丁家。1920年のデヴィエトスィル芸術家協会の設立に参加。チェコ独自のアヴァンギャルド運動であるポエティスムを理論化した。

1930年代にはチェコ・シュルレアリスト・グループの代表となり、フォトモンタージュを制作した。

- ・本調査研究報告は2006年度花王・学芸員研究助成を受けた研究「20世紀東欧の造形と映像」の成果の一部である。また、資料整理には2006年度神奈川県立近代美術館インターンの坂間真美さんの協力を得た。記して謝意を表したい。
- ・図版掲載書籍はすべて北海道大学スラブ研究センター所蔵である。